（様式３）

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	熊本県	市町村名	菊陽町	大学名	
派遣日	令和５年７月５日（水曜日） １　開会　午後３時～ ２　教育長あいさつ ３　講師紹介 ４　研修　午後３時１０分～午後４時１５分 　演題：「外国人児童生徒の受入れ～これまでとこれから～」 　講師：京都教育大学　教授　浜田　麻里　様 ５　質疑応答　午後４時１５分～午後４時３０分 ６　アンケート記入　午後４時３０分～午後４時４５分 ７　閉会　午後４時４５分 ※派遣当日の日程を詳細に記入してください。 ※派遣当日の次第、研修実施要項・日程表等、日程の詳細が分かる資料を添付してください。				
実施方法	※いずれかに〇をつけてください。　派遣　／　遠隔				
派遣場所	菊陽町防災センター（〒869-1192　熊本県菊池郡菊陽町大字久保田２８００番地）				
アドバイザー氏名	浜田　麻里　教授（京都教育大学）				
相談者	菊陽町教育委員会学務課 町内小中学校管理職及び教職員				
相談内容	・日本語が難しい児童が転入してきた場合、どう学力保障するか。 ・担任以外で個別に対応することは可能なのか。 ・給食（食文化）が大丈夫か。 ・突然転入してきた場合に、十分な受け入れ体制ができていないまま受け入れることになり、指導や対応に困ることやどう対応したら分からない時にどこに連絡したら解決するのかが分からない。 ・現時点でどのような準備をしておくといいのかを知りたい。 ・様々な国からの転入生への対応をどう行っていくか。 ・母語での支援ができるか。 ・日本語指導員の人数が足りるのか。 ・日本での高校受験を考えると、日本語で入試を解くことができるようになるまでに学力をつけさせるために必要なこと。 上記の町内小中学校からの外国にルーツのある児童・生徒の対応への疑問へ、具体例を交えて回答いただく形で講演を依頼しました。				
派遣者からの指導助言内容	「外国人児童生徒の受入れ～これまでとこれから～」と題して講演いただきました。 ・子どもの文化間移動 　全く新しい文化に適応しなければならない児童は、家庭と学校で異なる文化圏で過ごすことなどから２つの文化の中で違和感や劣等感が生じる。				

（様式３）

	子どもは柔軟だから大丈夫という意見もあるが、日本語ができないというだけで何もできない子としてみられるストレスを抱えたり、日本語に適応することで逆に母語を使う力が失われたりすることもある。 　日本文化になじめるようにするだけでなく、自己肯定感やアイデンティティのゆらぎをどうフォローするのかも考える必要がある。 ・第１言語（L1）と第２言語（L2）の関係 　人間の思考の発達は言語の発達のプロセスと表裏一体。 　→言葉と発達はセットである ・複言語・複文化能力を育てる 　↑もともとは EU で提唱されたものであり、様々な言語圏で多様な体験をしていることが豊かな人間を育むことにつながるという考え方。 ・日本語指導と在籍学級での指導の連携 　通級担当教員と通常学級担当の連携が課題。両者の細かい連携が大切である。 　日本語ができなくてもその子の力を延ばすためには何ができるのかという視点で授業を行うことが大切。 ・在籍学級と日本語教室の連携の例（小６国語科の例） 　例　通級指導による抽出で理解を進める→通常学級で発表等を行う ・習熟度別少人数指導（小５算数科の例） 　例　学年全体を習熟度別に分けて指導を行う ・在籍学級での授業参加を促進する 　言語に壁を感じる児童も授業に参加できるようにする。 　スキャフォールディング（足場かけ） ・つまずきをなくす支援 　バリアフリー、ユニバーサルデザインの支援。 　外国にルーツのある子どもの躓きのタネは、文化習慣の違い、歴史、物語の背景、授業スタイル、未習自校がある、発問、問題文、内容がわからないなど 　→授業全体の工夫（在籍学級）・・・授業構造化、活動の工夫 　　個別の配慮（在籍学級）・・・分かち書き、ルビ、視覚資料の活用。発問の工夫 　　個に特化した指導（抽出）・・・リライト教材、抽出での事前指導 ・日本語習得のプロセスと授業の工夫 　授業は日本語を習得する絶好の機会。 　　（日本語にたくさん触れる、文脈の中で理解する） 　日本語習得しやすくする授業を行うには、 　インプット・・・音・文字と意味の結びつかせるために、言葉をピックアップして板書するなどの方法が考えられる。 　気づかれたインプット・・・動作化、繰り返し話す、子どもの興味関心を高めるような授業が大切。 　アウトプット・・・わかったことを自分の言葉で表現する場を増やし、できなくても表現につながるように支援することでアウトプットの経験を増やすことができる。

（様式３）

	・在籍学級の授業参加を促す５つの支援 直接支援 １理解支援　日本語や学習内容の理解を促す ２表現支援　表現内容の構成や日本語での表現を促す ３記憶支援　語彙や表現の記憶を促す 間接支援 ４自立支援　自分で学習する力を高める ５情意支援　関心や動機付けを高める ・ワークシート ・教科と日本語の統合学習 ことばを学ぶことを目的にするのではなく、内容を学ぶ手段として言葉を使いながら学ばせる。 日本語が十分でない時期から考えて使う経験を積むことで日本語が身についていく。そのため、ことばと学ぶことを切り離さず考えることが必要。 ・算数科における実践例５年生「単位量あたりの大きさ」 教科のめあてと日本語のめあてを立てることが有用。 ・関係するさまざまな部署と連携することが大切。 子どもたちの学びを止めないように在籍学級で学べることが周囲の子どもの相互学習にもつながっていく。
相談後の方針の変化、今後の取組方針等	浜田教授の講義を伺って、在籍学級でできる支援が数多くあることに気づかされました。参加した教員からも「子どもの文化間移動の事例や具体的な例の話を聞くこと出来、今後に活かせます」との声があり、町教育委員会としては、引き続き本町の実情に合った新たな研修等を計画・実施していく必要があると感じました。

１枚にまとめる必要はありませんので**詳細に**記載願います。

なお、本報告書の内容は、文部科学省ホームページで公開いたします。